AROUND THE WORLD 33

英語から見たタイ語 [3]

峰岸真琴　Minegishi Makoto（東京外国語大学）

タイ語の発音と最初の文法

バンコクでは屋台で本格的な夕食が食べられる。帰宅前の人でいっぱいだ。

今回はまず母音から学ぼう。タイ語の母音は /i, e, ɛ, ɯ, ə, a, u, o, ɔ/ の 9 つである。こういうと多くみえるが，日本語の 5 母音に，大きく口を開く /ɛ, ɔ/（それぞれ英語の /æ, ɔ/ に近い），唇を小さく丸めた /u/ に対して唇を /i/ のように横に引いて発音する /ɯ/（歯を食いしばって「ウ」を練習する），英語の schwa に近い /ə/ を加えればよい。母音には長短の区別がある。英語と違って長母音を発音するときに口を開く動きがなく，安定しているので，習得は思ったほど難しくはない。これらの単純母音に加え，/ia, ɯa, ua/ の 3 つの二重母音もある。

次は声調である。声調（声の高低による単語の区別）には，中平調，低平調，下降調，高平調，上昇調の 5 声調がある。一音節の中で高低があるので，一見習得が難しそうだが，幸い日本語共通語には高低アクセントの区別があるので，これを利用する。習得のコツは，単語ひとつひとつの声調を覚えようとするだけでなく，まずは決まり文句の中で高低の感覚を身につけることである。

例えば，男性が言う場合の「ありがとう」はタイ語では “khɔɔp khun khrap”（khrap は男性が使う終助詞で，丁寧の「です・ます」に相当する）だが，これは低平調から中平調へ，さらに高平調へと，階段状に音階が高くなっていく。女性が言う場合は，“khɔɔp khun khaa”（khaa は女性が使う丁寧形の終助詞）と，低平調から中平調へと上がってから，最後の単語（khaa）で下降調になる。このように，まずフレーズの音階を正しく学んでから，改めて「khɔɔp は低平調」などと覚えると身につきやすい。

最後に文法を少しだけ紹介しておく。主語を S，動詞を V，目的語を O で表すと，基本語順は SV あるいは SVO 語順であり，英語と同じである。ただし英語と違い，「彼に本を与える」などと言う場合は「与える＋本＋彼」，つまり直接目的語＋間接目的語の順になる。

名詞句は原則，主名詞＋形容詞＋指示詞の順である。冠詞はなく，「（何）人，個，着」などの「類別詞」でものを数える。例えば，「これらの美しい 3 着の服」は，「服＋（着＋美しい）＋（3 着）＋（たぐい＋この）」という語順になる。タイ語の類別詞は日本語の助数詞より自立性が高く，「着＋この」＝「この（服 1）着」のように，主名詞を指す代名詞のようにも用いられる。

このように，基本語順は英語に，類別詞は日本語の助数詞に似ている点が興味深い。

表紙写真について

アッファール族の女性たち

安藤はるか　Ando Haruka（青年海外協力隊員，ジブチ在住）

「我が家を見せてあげるわ」。そう言って彼女が自慢げに見せてくれたのは，大きくて立派なアッファール族の移動式住居，トゥックルだ。照り付ける太陽と乾燥した熱風から身を守るために，木の骨組みの上には，乾燥させたヤシの葉を編み込んでできた莫座（ござ）が何重にも重ねられている。

ディキル州はジブチ共和国で最も広く，アッファール族の遊牧民が多く住む。乾季はしばしば摂氏 50 度を超し，干ばつに見舞われる過酷な環境だが，先祖から受け継がれてきたこの土地と伝統に彼らは誇りを持ち，それらを守るためラクダやヤギを遊牧して暮らす。女性たちの仕事は家事や子ども・家畜の世話以外に，トゥックル作りや，ヤシの葉で編んだ水壺を作ることだ。水はここではとても貴重なので，漏れてこないよう頑丈に編み込まれている。ヤシの葉が鉤針（かぎばり）に通され，みるみる姿を変えていく様（さま）に，いつも目を奪われる。

青年海外協力隊として，彼女たちの村や集落を巡回するようになって一年が過ぎた。この一年は過酷な気候に適応するのに必死だった。そんな時，あのトゥックルの中で暮らす彼女たちのことをふと思い出す。訪問者を家でもてなし，暑さの凌ぎ方など生活の知恵を分けてくれた。また常に美しくいようと，髪を編み込み，爪をオレンジに塗り，歯を研ぎ，伝統模様を顔に描いていた。明るい配色の服が彼女たちの肌の色を一層引き立てていた。そんな優しく，美しい彼女たちに，習慣は違えど，同じ女性として通じるものを感じていた。彼女たちは何を考え，何を喜びとしているのだろう――知れば知るほど，彼女たちへの興味が湧いてきてやまないのだ。